



2023年11月30日放送

## 日薬アワー 第56回日本薬剤師会学術大会「和の心 ～未来へ～」

日本薬剤師会  
常務理事 高松 登

第56回日本薬剤師会学術大会は、9月17、18日の2日間にわたり和歌山市で開催されました。これ以前の3年間は新型コロナウイルス感染蔓延の影響もあり、WEB配信のみや、現地とWEB配信のハイブリッド開催で感染防止策を徹底しての開催を意識せざるを得ませんでした。本年の5月には新型コロナウイルス感染症が感染症法上の5類に移行したことに伴い、様々な制約が解除されたこともあって現地参加を促し、顔を合わせての情報交換を行うことができた大会でもありました。あくまでも医療従事者として、感染しない、うつさないを意識し、マスクの着用や手指消毒を意識して行う参加者の行動も印象に残りました。

さて、今回、和歌山で学術大会を開催するに至った経緯を少しお話したいと思います。今大会の大会運営委員長を務められた和歌山県薬剤師会 稲葉会長の言葉をお借りすると、コロナ禍以前、日本各地はインバウンド効果による観光客増加に沸き、それに合わせて学会等県外から多人数が集まる催事の開催を求める声も多く、和歌山においても県議会議員・市議会議員の担当者から県薬剤師会に学術大会開催の強い要望があったそうです。また、念願の和歌山県立医科大学薬学部創設が決定し、令和3年度開設に向け準備作業や、伏虎キャンパスの建設が進められている状況でした。一方で過去10年の学術大会開催地を遡れば、政令指定都市を中心にいずれも新幹線沿線都市で開催され、地方都市では開催し難い雰囲気を感じておられたようです。

しかし、和歌山での開催に県・市・大学の全面的な協力を受けられ、会場となり得る伏虎キャンパス及び和歌山城ホールが建設される今の時期を逃せば、今後開催する機会はないものとお考えになり、過去の開催県に比べて交通の便・宿泊施設等々の地方都市特有のハンディキャップがある事は認識しつつも、平成30年に日本薬剤師会に開催を申し込み、令和5年の開催が決定しました。

開催にあたり、和歌山県薬剤師会役員全員で実行委員会を組織され、開催方法はコロナ禍

の行方が見通せない事、仕事や育児等の事情で現地参加が困難な方でも参加可能となるよう現地と WEB でライブ配信によるハイブリッド開催とされました。会場は和歌山県民文化会館、ホテルアバローム紀の国の「県民文化会館ゾーン」と、和歌山城ホール、和歌山県立医科大学薬学部施設で構成する「和歌山城ホールゾーン」をうまく組み合わせ実施する案を採択し、その後具体的なプログラム等の開催内容について検討が始められました。開会式、表彰式をはじめ、特別記念講演や特別講演、県民公開講座、分科会、口頭発表、ポスター発表などについて内容を詰め、日薬とも役員打ち合わせや情報共有、事務局間の調整作業など、多くの過程を経て、当日の開催を迎えることができました。

今大会は、「和の心 ～未来へ～」をメインテーマに、参加登録者数として現地参加 4,422 名、Web 参加 1,532 名の計 5,954 名が参加されました。学生も 157 名が参加しています。この大会テーマには、大きく変遷しつつある薬剤師業務において、底流をなす最も重要なアイデンティティは、地域の住民の皆様や医療・介護等の他職種等、薬剤師を取り巻く多くの人々とお互いの立場や状況を理解し尊重し合うことだと考え、「和をもって貴しとなす」、「和して同ぜず」の相反する印象のある古くからの言葉に薬剤師の独理性の思いが込められていました。

初日の開会式で大会長の山本信夫日本薬剤師会会長は、5月に石川県能登地方で発生した地震、並びに今夏の風水害によって被害にあわれた皆様へのお見舞いを述べられた後、「2020年1月に国内初の新型コロナウイルス感染者が確認されて3年余が経過し、都道府県薬剤師会、地域薬剤師会、地域の薬剤師・薬局の薬剤師が、新型コロナウイルスワクチンの集団接種への協力を始め、OTC医薬品や医療用抗原定性検査キットの提供、自宅等で療養する地域の人々への医薬品提供体制を確保し維持するために、自身の感染防御に努めながら日々尽力されたことに改めて御礼を申し上げる。今後のポストコロナの環境にあっては、国民のセルフケア、セルフメディケーション推進に向けて、これまで以上に地域の薬剤師・薬局の担う役割は大きくなっていること、第8次医療計画の実施に向けて示された指針において、5疾病、新興感染症対策を含む6事業、並びに在宅医療のすべてに、薬剤師・薬局の役割が明記され地域の医薬品提供体制の下で、薬剤師が担う役割は重要であること、こうした期待に即応するには様々な職種との連携や地域住民との密接なコミュニケーションの確立が不可欠で、その思いを託した本大会テーマ「和の心～未来へ～」は超高齢社会を目前に、時宜を得たテーマであり、本学術大会を通じて得られた成果を日々の業務に活用していただけるものと確信している」と述べられました。

続いて、大会運営委員長の稲葉眞也和歌山県薬剤師会会長は、「会員数1,000人にも満たない小さな県であることを顧みず開催に手を挙げたものの、開催は無理かと思うところも多々感じたが、多くの人々の助けを借りながら本日を迎えた。当初から感染状況に関わらず、和歌山に来たくても来られない人のために、ハイブリッド形式を企画していたが、費用の面でWeb中継会場を制限せざるを得ず、分科会のセッションの質を落とさずに、そのほかで切り詰めて何とかしたいと努力したので、質素すぎるかと感じるところもあると思うがご容赦いただきたい。こういう厳しい状況であるが、和歌山県薬剤師会一同、何とか素晴らし

いおもてなしをしたいと頑張ってきた。」と述べられ、加えて大会期間中の気候が暑い日が続くと予想されていることにも触れ、各会場に休憩場所を用意するなど適度に休憩をとりながら、しっかり学び仲間と語り合い、和歌山の学術大会の醍醐味を味わい、充実した時間を過ごされるよう歓迎の旨を述べられました。開会式では岸本周平和歌山県知事をはじめ多くの来賓の方のご臨席があり温かいご祝辞を頂きました。

続く開会式第二部の表彰式では、令和5年度の日本薬剤師会賞（6名）、同功労賞（8名）に山本会長より表彰状並びに副賞が授与されました。

そして、第三部の特別記念講演では、和歌山県立医科大学薬学部教授・薬学部長であり、日本薬学会元会頭の太田 茂氏より、「薬学部におけるこれからの人材養成」と題した講演が行われ、注目されている薬剤師の養成や資質向上を目指す薬学教育のあり方を提唱されました。開会式の後は、午後より翌日午後までの2日間に亘り、特別講演3題、本会会長講演、19の分科会、会員による口頭発表128題、ポスター発表267題、そしてモーニングセミナー、ランチョンセミナー、イブニングセミナーなど、多彩なプログラムが実施されました。特に分科会は大会テーマに沿った内容で構成しつつ、「海外の医療制度と薬剤師業務」など国際的な視野の重要性、医療DXやデジタルメディスンなどの新たなキーワードへの理解、南海トラフ地震への備えなど将来に目を向けて多岐に亘る内容でした。また、今大会の日薬ポスター優秀賞は審査の結果、最優秀賞1演題、優秀賞5演題が選ばれました。口頭発表やポスター発表の傾向として感じたのは、以前は実践報告に留まっていた内容が、近年では大学や病院等との共同研究や、データの分析・評価をまでしっかり実施した研究など、内容が充実してきている印象です。コロナ禍においても熱心に研究に取り組み発表された多くの先生方には、改めて敬意を表します。

大会2日目の午後には、県民公開講座として、「健康と笑い～人生100年時代 楽しく・おもしろく～」と題した講演が行われました。薬剤師会の学術大会であるので、県民に薬剤師をアピールするためには、薬剤師の講師がふさわしいとの思いから、薬剤師で一般の人にも分かりやすく楽しい話の期待できる中井宏次氏に講演をお願いされたとのこと。広報にも力を注がれ、各薬局でのリーフレット配布、地元紙2紙への広告掲載、地元テレビ局でのスポット広告および案内番組での告知等を行い、415名が参加され、大会の全日程の幕を閉じました。

最後に、今大会にご尽力いただいた和歌山県薬剤師会の皆様に深く感謝の意を表して、本日の私のお話を終えたいと思います。